ひびき
No.27
ドラム缶工業会会報

ドラム缶等の平成11年度出荷実績と平成12年度需要見通しについて

（平成11年度出荷実績）

200L缶は上期47.9%、下期52.1%とほぼ例年通りの出荷傾向でしたが、実績本数としては、上期5,948千本、下期6,471千本、合計12,419千本と前年比プラス1,039千本、109.1パーセントの伸びとなり、平成9年度（12,454千本）に近い水準に戻りました。

その理由としては、エチレン生産量が2年ぶりに増加し、772万トンと過去最高を記録。この効果と、Y2K問題対応による生産増、一部石油向け再生缶メーカーの工場閉鎖に伴う応援という特殊要因が加わったもので、用途別実績で見られるように、各部門共伸びていますが、少なくとも主力部門である化学業界は前年の最悪期は脱したものと想定されます。

中小型缶では、200L缶と同様前年比108.9%となりましたが、10年度がボトムの状態と考えれば、持ち直して元に戻った感じですが、決して高い水準まで戻せたわけではなく、依然として低迷している状態です。

ペール缶は、予想を上回り、対前年度比103.5%の24,928千本となりました。これは、全体の43.8%を占める化学が105.8%と伸びたことによります。

（平成12年度需要見通し）

本年度の見通しについては、いつにかかって最悪期を脱したと見られているマクロ経済が実態面でどう推移するかにかかっていると思います。

200L缶については、総需要の見通しを基本的には前年

[表-1]　平成11年度缶種別・用途別出荷実績および平成12年度缶種別需要見通し

缶種	平成11年度実績								平成12年度見通し		
	本数（千本）	前年度比（%）	用途別（本数）石油	化学	塗料	食料品	その他	トン数	本数（千本）	前年度比（%）	トン数
200ℓ缶	12,419	109.1	2,022	9,251	623	172	350	293,962	12,200	98.9	288,774
ペール缶	24,928	103.5	12,523	10,928	758		719	40,092	24,810	100.4	39,944
中小型缶	1,134	108.9	26	1,052	1	1	54	7,471	1,122	101.2	7,394
亜鉛鉄板缶	320	95.0		306	3	微	10	3,646	323	99.8	3,621
ステンレス缶	32	114.3		32			1	734	29	99.0	659
合計	38,833	105.3	14,571	21,569	1,385	174	1,134	345,905	38,484	99.9	340,392
前年度比（%）	105.3	-	108.4	110.0	103.8	126.7	94.3	108.4	-	-	99.1
構成比（%）	-	-	16.3	74.5	5.0	1.4	2.8	100.0	-	-	-

（注）前年度比は2月策定の需要見通し時点との比較

[表-2]　品種別出荷推移

本数（単位：千本）

缶種	平成4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度見通し
200ℓ缶	12,157	11,189	11,814	11,636	12,142	12,454	11,380	12,419	12,200
ペール缶	26,622	24,805	25,539	25,474	25,711	25,662	24,079	24,928	24,810
中小型缶	1,775	1,336	1,185	1,201	1,186	1,197	1,042	1,134	1,122
亜鉛鉄板缶	509	341	324	318	357	336	337	320	323
ステンレス缶	37	37	26	21	23	22	29	32	29
合計	41,100	37,708	38,888	38,650	39,419	39,671	36,867	38,833	38,484

度並と想定しました。ただし、部門別に、1.石油向けは業界の再編、事業の統廃合による合理化の進展および前述の特殊要因　2.食料品向けはジュース缶の下期スポット需要分　以上2点を調整事項として折り込み、年度計12,200千本、前年度比98.9%と策定しました。
（注）なお、この策定本数は2月時点であり、11年度推定実績12,337千本、伸び率98.9%を前提としたものです。念のため同じ伸び率では12,262千本となります。

中小型缶については、他容器への移行は、物流包装材の見直しの中、落ち着いてきた感じを受け、景気回復の徴候は見えないものの、前年比101.2%程度と想定しました。国内需要に緩やかな伸びが出て来る期待感を持ちます。

ペール缶については、石油業界の再編・提携が缶の取り引きで具体化する年度に当たり、大変予想が困難な状況です。現時点では明るい材料が見当たらず、年度計で24,810千本、前年度比100.4%の見通し（2月需要見通し時点）を策定しました。

ドラム缶のある風景

工場のある地域で進められている「地域緑化推進事業」。当社もドラム缶を大きな鉢に見立てて、「環境に優しいドラム」をアピールしました。**（写真提供：尾家春義氏）**

Dr.ドラムの“缶々学々”講座

本シリーズの第二回は、ドラム缶の「社会学」を学ぼうということで、ドラム缶の用途別出荷構成比にスポットを当てて見ました。

第2回：社会学の巻
全体の4分の3は化学業界で使われています

――ドラム缶が一番使われているのはどの業界でしょうか？

Dr.ドラム　ドラム缶が大量に使われる業界はほぼ決まっておって、昔は石油業界と相場が決まっておった。ところが、戦後、日本の化学業界の発展に伴い、昭和40年代前半から化学業界が石油業界を逆転するに至ったのじゃ。以後は化学業界が石油業界を引き離す一方で、現在では化学業界がダントツ1位の使用先ということになっておる。

――ダントツ1位というと、どのくらい？

Dr.ドラム　一番新しい平成11年度（1999年4月～2000年3月）のドラム缶生産・出荷統計資料によると、国内全体で200L缶は約1,242万本出荷されたと報告されておる。多い順に並べると、化学が約925万本、石油約202万本、塗料約62万本、食料品約17万本、その他約35万本ということになるようじゃ。化学は何と74.5%、約4分の3の需要を占めているわけじゃ。

――200L缶はそうでも、石油業界ではペール缶が多く使われています。すべての缶種で見ると、どうなるのでしょうか。

Dr.ドラム　確かにペール缶だけを見てみると、石油業界で一番多く使われておるが、化学業界も匹敵するぐらいの本数を使用しておる。参考までに、平成11年度のペール缶出荷実績は約2,493万本で、石油が約1,252万本（50.3%）、化学約1,093万本（43.8%）と、この二つの業界で大半を占めておる。でも、大勢には変化なしじゃ。

――えっ、それはなぜですか？

Dr.ドラム　缶種の違うものを、本数で比較しても始まらんのじゃ。こういうのはドラム缶の出荷トン数の構成比で見ることになっておる。平成11年度の実績は、すべての缶種を合計すると約34万6千トン。その内訳は、化学が約24万8千トン（71.6%）、石油約6万8千トン（19.5%）、塗料約1万6千トン（4.7%）、食料品約4千トン（1.2%）、その他約1万トン（3.0%）ということになっておるようじゃ。

――おそれいりました。

『ドラム缶工業会50周年史』関係者にインタビューを開始

2002年（平成14年）9月の創立50周年を目指して50周年史の編纂を進めている「ドラム缶工業会50周年史編纂委員会」では、基礎資料の収集や基本構成案の作成を終えて、予定通り、歴代ドラム缶工業会関係者へのインタビューを開始しました。

その第一弾は、編纂委員会のメンバーで、1982年（昭和57年）から1997年（平成9年）まで事務局長を務め、ドラム缶業界の歩みを最も良く知っている人物の一人といわれている柴野正裕氏。去る3月29日、化学工業日報社本社で、長時間にわたるインタビューが行われました。柴野氏は「前史」から始まって「工業会の組織の変遷」、「国際交流」、「危険物容器への対応」、「広報活動」、「エピソード」まで、幅広く言及。同席したほかの編纂委員会のメンバーは「ドラム缶業界の歴史について、断片的には聞いていたものの、今回のインタビューで、改めて一貫した流れが把握できた」と、印象を語っています。

引き続き、歴代理事長、歴代委員長、長老諸氏など、20人以上の方々への個別インタビューが予定されていて、編纂委員会はますます活気づいてきました。

会員の皆様も、この50年間のドラム缶に関する情報や資料、さらには製品や設備・機器などをお持ちでしたら、編纂委員会までご連絡ください。

編纂の模様は、この会報で報告してまいります。

『ドラム缶工業会50周年史』にどうぞご期待ください。

——*——*——

「ドラム缶工業会50周年史編纂委員会」メンバー

委員長：中川義幸（日鐵ドラム㈱専務取締役）

委　員：柴野正裕（ドラム缶工業会前事務局長）、郷　邦造（日鐵ドラム㈱）、藤野泰弘（ドラム缶工業会事務局長）

編纂協力：化学工業日報社

（編纂委員会連絡先：TEL 03-3669-5141）

コラム

感動を求めて

歳をとったせいか、物事に感動することが少なくなった。

これまでも美術展での名画や古寺での国宝佛その他いろいろ素晴らしいものに接してきたが、感受性の乏しさもあってか、「まあ、こんなものか」という感じがほとんどであった。

しかし、最近、いくつか感動する場面に遭遇した。

早朝の尾瀬の草紅葉、朝日に輝くアイガー北壁、そして奥志賀の雪の露天風呂から望んだ北アルプスに落ちる夕日、いずれも今でも心に鮮やかに残っている。特にアイガーでは、「心が洗われる」とはこういうことか、ということをまさに実感した。

悠久の大地、大自然の中でちっぽけな自分の存在を再確認する至福の時であった。

厳しさを増す経営環境の中で心のうるおいを失わぬよう、これからも感動ある旅を続けたいと思っている。

最後に一言。今秋には長嶋巨人の日本一達成で大きな感動を味わいたいものである。

（鋼管ドラム　大野良司　記）

トップの素顔

山道で鍛えた足腰で今も「現場回り」

株式会社東京ドラム罐製作所
代表取締役社長　中村　福幸さん

昭和57年に㈱東京ドラム罐製作所の3代目社長に就任され、現在も3社の社長を努められている中村社長。「休息のための休息はいらない」と今も仕事一筋。しかし、時には以下のような詩（うた）も詠まれ、ハーモニカ片手に作曲もされる。

「山坂や　嵐を越えて　遠き道
　耐えて　忍んで　野に花の咲く」

――ご出身は徳島県だそうですね。

★美馬郡半田町大惣といって、標高800mの山の中です。

――では通学にはご苦労されたのですね。

★小4までは分校場へ2km、小6までは6km、高等科2年までは10km歩きました。でもそれがふつうでしたから、当時は苦労とは思わなかった。ただ行きは下りだからいいのですが、帰りは上りなのでとにかく時間がかかる。冬の帰り道は提灯片手でしたよ（笑い）。

――その後青年学校、海軍志願兵として藤沢電測学校時代を経て、終戦となるわけですね。

★最後は「桜花」の訓練を受けていたのですから、九死に一生というところですが。終戦後はしばらく実家で炭焼きの手伝いをしており、その後東京の叔父の所の世話になりました。

――それがドラム缶との出会いですね。

★今で言う更正缶ですが、当時は簡単に洗って直して納めてました。しかし、苦しい時代でしたから思うように食べていけない。そこで「とにかく食べたい」の一心で、昭和27年に隅田区寺島町で10坪の店で独立・開業しました。

――ちょうどその年、結婚されたのですね。

★はい、女房の実家からも出資してもらい、リヤカーと自転車と自分たちの身体だけを頼りに、古缶を買ってきてはこすったり磨いたりの毎日でした。それでも2年ちょっとで現在の四ツ木で開業できるようになりました。

――社業が順調になってからも、45才から定時制高校や簿記学校へ通われたりと忙しい日々ですね。

★71才になった今も工場周りが趣味の[illegible]になっています。考えてみると、「我が人生に余暇は無し」がモットーと言えそうです。

現場で体得「誠意を持って接すれば」

東邦シートフレーム株式会社
代表取締役社長　村上　靖さん

今年4月に代表取締役社長に就任された村上社長。富士製鉄～新日鐵時代は「とにかくさまざまな部署・場所を経験しました」という。その元気の源はスポーツで作られた？

――故郷は？

★生まれは満州の大連ですが、高校時代は奈良へ通ったものの、小学校から大学まで京都でしたので、故郷は京都ということにしています。

――小さい頃は京都ならではというスポーツに熱中されたとか。

★はい、小学5年の時、武徳会という古式泳法の会に入って、小堀流を習いました。

――天皇家も小堀流だそうですね。一般の競泳との違いは？

★もちろん遠泳など純粋に泳ぐこともありますが、小堀流は立ち泳ぎが主体の流儀で、甲冑を着て立ち泳ぎをするとか、立ち泳ぎをしたまま水中で字を書く「水書」もあります。

――高校生の頃は教えてらしたとか。

★ある程度の年齢になると、子供たちを指導するのです。結局大学時代まで続けて四段を取得しました。また大学時代はスキー競技部にも所属していたんですよ。

――成績はいかがでしたか。

★関西インカレでは、団体で2部優勝したこともあります。しかし翌年は1部で最下位、そしてまた2部戻り（笑い）。

――スポーツは今も続けておられますか。

★スキーだけは今でも年20日ぐらいは行きます。とくに正月は、大学時代のOBが所有しているヒュッテが志賀高原にあるので、10家族ぐらいが同窓会を兼ねて集まるのです。私も家内と行くのですが、3人の子供のうち毎年1～2人は参加しますよ。

――昭和40年に富士製鉄に入社されてから、いろいろな場所を経験されたそうですね。

★はい、東海製鉄（稼動しながら建設中）の名古屋時代を始めとして、韓国・ブラジル・メキシコでの建設指導、ロスアンゼルス事務所での技術サービス、中国協力本部・チタン部も経験しました。

――そして平成7年6月から東邦シートフレーム㈱ですね。

★八千代工場の工場長となりました。

――最後になりますが、モットーは「誠意」とか。

★はい。部署・場所はいろいろと経験しましたが、「現場」が多く、こちらに来てからもずっと工場を見てきて、やはり「現場では対話が大切で、誠意を持って接すれば必ず理解し合える」と実感しています。

会　員

秋田ドラム工業㈱　川鉄コンテイナー㈱　協和容器㈱
鋼管ドラム㈱　斎藤ドラム缶工業㈱　山陽ドラム缶工業㈱
新邦工業㈱　ダイカン㈱　大同鉄器㈱　㈱東京ドラム罐製作所
東邦シートフレーム㈱　㈱長尾製缶所　日鐵ドラム㈱
㈱前田製作所　森島金属工業㈱　㈱山本工作所　㈱ユニコン

《賛助会員》

エノモト工業㈱　三恵マツオ㈱　丹南工業㈱　㈱大和鐵工所
三喜プレス工業㈱　㈱城内製作所　東邦工板㈱　㈱水上工作所

ドラム缶工業会
東京都中央区日本橋茅場町 3-2-10
（鉄鋼会館3階）
TEL 03-3669-5141　FAX 03-3669-2969

ひびき　No.27（平成12年5月11日発行）
発行人　ドラム缶工業会
事務局長　藤　野　泰　弘
本誌は再生紙を使用しています。